〈研究ノート〉現代台湾人女性の「社会進出」をめぐる聞き取り調査に向けて――植野弘子「父系社会を生きる娘――台湾漢民族社会における家庭生活とその変化をめぐって――」を出発点として――

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-08-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 陽香 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24885

〈研究ノート〉現代台湾人女性の「社会進出」をめぐる聞き取り調査に向けて ― 植野弘子「父系社会を生きる娘 ― 台湾漢民族社会における家庭生活とその変化をめぐって ― 」を出発点として

東北学院大学　大学院人間情報学研究科人間情報学専攻
博士課程前期課程 2 年　伊藤陽香

はじめに

本稿は、自身の修士論文研究において現代台湾人女性の高度な社会参加傾向を描き出すにあたり、植野弘子「父系社会を生きる娘―台湾漢民族社会における家庭生活とその変化をめぐって―」（以下「植野（2011）」）を分析枠組みに据えることを試みた論考である。植野（2011）は、それまでスポットライトを浴びることの少なかった台湾漢民族の家族における娘の役割に注目し、親と娘のつながりを再考するものである。日本植民地期の高等女学校で学んだ台湾人女性の日常生活についての語りの分析から、彼女たち自身、家族関係、そして台湾社会がより生き生きとイメージできる構成となっている。また親と娘の関係に焦点を当てる視点は、1 人の人間の人生を連続的に捉えることも可能であるし、台湾社会一般の動きとして捉えることもできる、多方面に応用可能な視点であると考えられる。

2016 年に初の女性総統が誕生、World Economic Forum（2020）による「ジェンダーギャップ指数（Global Gender Gap Index：GGGI）」ではアジア最高位の 29 位[1]（日本は 153 カ国中 121 位）をマークするなど、女性活躍という側面が注目されることが何かと多い台湾である。しかし植野（2011） によれば、1897 年に台湾人女子のための教育の場として、台北に国語学校第一付属学校女子分教場が設立された当時、良家の娘は外に出て人目にふれるべきでないとの観念が強かったという。日本植民地政府により近代教育が進められていく新しい時代を生きた彼女たちを、植野は「変化した現代女性の原型」と表現する。彼女たちの語りに、彼女たちの親もまた社会の変化に対応していこうとし、彼女たち自身の判断の背景に親の考えやアドバイスがあった、との内容が含まれていることも興味深い。彼女たちの人生が、自らの志向だけでなく漢民族の強い親族ネットワークの枠組みの中で決定付けられていった部分が大きいこと、そして彼女たちの親の柔軟な対応力についても、注意を払いたい。

複数の国家に統治されてきた歴史を持つことや多民族国家として知られる台湾は、「重層的な社会」として多数の先行研究において慎重な姿勢で論じられているが、日本社会一般にそうした理解が定着しているとはまだまだ言い難いだろう。賞賛や、日本も見習うべきという文脈で語られることも多い台湾女性の社会進出だが、一方で職場内や家庭内でのジェンダー不平等の存在を明らかにした張（2010）のように、台湾社会の課題を提示する向きもある。「〇〇がアジア最高位」などという単純な表現だけで台

[1] 台湾については World Economic Forum が公表していない為、台湾行政院性別平等處（2020）による同手法の計算結果。

湾を語ることはできないということを、より一般的な認識として理解を促していく必要があると感じる。

自身の修士論文研究においては、現代台湾人女性における高度な社会参加傾向を説明したいのであるが、本研究ノートはそのための一つの道筋として、近代教育を受けた女性たちの語りを通じて家族関係の変化を描こうとした植野（2011）の視点を援用する可能性を問うものである。なお、そのような趣旨で書かれたものであるため、植野（2011）に描かれた内容を網羅的に紹介するものでない点にご容赦をいただきたい。

まず１章では植野（2011）から、自身の予定している日本在住の台湾人女性への聞き取り調査に際し、特に重要と思われる箇所を紹介する。次ぐ２章では、より新しい時代の詳細なデータを示すなどしながら、台湾社会やその変遷について整理する。最後の３章では、植野（2011）によって提供された気づきを踏まえ、自身の今後の研究の展望と課題について述べる。

１章　娘と親とのつながり

「結婚以前の家族との関係を見ずに、人の一生を語ることはできない」（植野（2011））。父系社会における親族・家族にまつわる先行研究においては、男性同士のつながりや、女性についても婚姻後の婚入集団における諸関係に注目する傾向があったことを省み、親と娘の生涯にわたるつながりを読み解くことから、父系社会において男女が、親として子として生きるありさまを描き直すことが植野（2011）の目指すところであった。その中で自身に特に重要と思われる項目３点について以下に整理する。

1-1. 娘から生家へ － 儀礼的役割にみる娘の存在の重要性

婚前婚後を通じた儀礼の中に娘のなすべきことが組み込まれていることは、親に対する娘の重要性を示すものであるとし、植野（2011）では伝統的婚姻儀礼としての、花嫁と生家との断絶を意味する儀礼、花嫁と生家とを繋ぐ儀礼の存在に言及されている。以下では後者に注目し紹介する。

結婚式翌日などに行われる里帰りの際、婚家に戻る夫婦に妻の生家から贈られる<禿路鶏> と呼ばれる雌雄の鶏がある。生家に戻る道を忘れないための「道案内の鶏」、雌雄であることは子孫繁栄を意味している。また親の死に際しては、その知らせを受け取った娘は生家に泣きながら戻らなければならない。出棺においても娘たちが供物を出すことが求められる。死後７回行われる供養儀礼のうち３回目は娘が行うもので、娘たちはみな生家に戻り供物を用意する。婚出してこそ親に対して娘としての儀礼的なつとめを果たすことができることから、未婚の娘にはこの義務はない。

親と息子の関係性が論じられることの多かった漢民族社会における家族関係において、娘が一定の役割を演じていることについては、植野（2011）の聞き取り調査でも女性たち自身によるその実践が語られている。そしてこの供養の慣習は現在においても継続しており、生家における娘としての儀礼的役割の意義は変化していないという。

1-2. 生家から娘へ － 経済的援助・贈与にみる親のサポート

婚出の際、娘は生家の親から持参財〈嫁粧〉を受け取る。その後も家屋の新築・改築の際にも生家からの経済的援助があり、

娘夫婦の家族の繁栄を願う形式化した行為であるという。この生家から娘への経済的援助・贈与は、前項で述べた、婚出後の娘の生家での儀礼的役割と対応するものである。婚出した娘は生家の親から援助を受け、その親の死に際には夫と共に、子としての役割を果たす。植野（2011）は女性たちの語りから、生家の父にとってその娘は、婿という自らを援助してくれる関係者を繋ぐ存在であったと分析し、娘の存在を通じて、姻戚関係を結んだ家族との相互的関係がより的確に把握できるとしている。

1-3. 娘の表象的役割

植野が聞き取りを行ったのは、高等女学校教育を受けた女性たちである。1895 年から始まった植民地統治のスムーズな遂行の為、台湾人女性に対する近代的学校教育の必要性が説かれるようになった。そうした古い体制から新しい体制への変化の時代を生きたのが彼女たちである。

植野（2011）で考察されるのが、家族の表象としての娘の役割である。いかなる花嫁道具をもって嫁ぐのかによって、娘はその家の経済力を示した。そして近代教育が台湾に持ち込まれるようになると、それまで人目に触れることのなかった良家の娘が家の外に出るようになる。高等女学校生というハイカラな娘の姿は、財力とともに、親の新しい時代への即応力をも投影していた。

植野（2011）によれば、かねてより娘が花嫁として行ってきたことを近代的な学生として行うという新しい形の出現において、娘が家族の表象であるという親と娘の関係の本質は変わっていないという。女性たちの語りにも、勉強の成績が良いと父が喜んだというエピソードが登場している。成績優秀な娘、そしてこの後に触れるが確実な職を持つ娘は、親の誇りなのであり、この点は現代にも共通する。植野（2011）の親と娘の関係性に注目した視点によって、娘の家族を表象する役割が過去から現在まで通ずるものとして存在していることが明らかになった。

2 章　現代台湾人女性の「社会進出」

私は 2014 年～2015 年に台湾に滞在していたが、この時に出会った台湾人女性たちは、学業や仕事、プライベートすべてにおいて活動的であるように私の目には映った。なぜそれが成り立つのかという疑問が自身の研究の根底に横たわる問いである。彼女たちに対しこのような印象を抱く日本人は私以外にも沢山いるのではないかと思う。上記の問いに対しアプローチする為の下準備として、台湾人女性を取り巻く社会的状況を他の先行研究を参照しながら以下で整理する。尚、植野（2011）で焦点が当てられている高等女学校生は、植野自身が述べているように裕福な階層出身であるので、ここではそうした限定を外し、より台湾社会一般の状況に注目したい。前述したように、植野（2011）の聞き取り調査対象者たちが生きたのは日本統治時代からその後の戦後の中華民国政府の時代であり、旧来の家族観や男女役割意識が大きく変化した時代である。植野（2011）によれば、現代では男女均等に教育機会があり、就業し、より高い学歴をもつ人ほど、家族の援助を得て結婚後も就業継続することが可能だという。

それでは実際の変化について数字でみていく。まずは二年制と四年制をあわせた高等教育進学率をみてみると、統計開始の 1978 年は男性 5.25%、女性 2.77%（分母は中学以下などすべての学歴を含め 100）であっ

たが、そこから上昇を続け、1999 年男性 12.17%、女性 10.16%と初めて全体の 1 割を超えた。2011 年には男性 18.89%、女性 18.99%と初めて女性が男性を上回り、2020 年では男性 21.96%、女性 25.61%となっておりここ数年男性は 21%台、女性は 25%台で微増減しながら推移している（行政院主計總處 2021）。

高等教育を受けた女性の就職率がもっとも高いことについては、植野（2011）の他、斧出・藤田（2007）、瀬地山（2017）、寺村（2021）でも同様の言及がある。学歴別女子労働力率をみると 2012 年大卒以上 78.3%、短大卒 71.1%、高卒 62.3%、中卒以下 27.8%というように、台湾は学歴上昇に対応して有業率が上がる社会である（瀬地山 2017 ）。

瀬地山（2017）は、台湾と、学歴上昇に対応し就業率が上昇しない韓国、台湾と比べ緩やかな上昇になる日本の差異は、文化規範により生じると説明した。学歴上昇に応じて女性の労働力率が高くなるか否かが、その社会での女性の社会的地位を考える上で重要であり、高学歴になるほど労働力化が進む社会は、女性労働のイメージが高階層のものになり、主婦の相対的地位が下がりやすいという。

台湾と日本の、都市と地方の専業主婦比率と週間労働時間の比較を行った寺村（2021）によると、日本の専業主婦率は都市で 42%、地方で 38%、台湾では都市で 20%、地方で 25%となっており、日台の比較において日本のほうが専業主婦率が高い。また都市で専業主婦が多い日本、逆に地方が多い台湾という違いがある。この理由として日本の都市部では男性の賃金が高いことから男女分業が可能となっていること、台湾の地方ではいまだ保守的価値観が根強いことがあげられている。週間労働時間については日台ともに都市と地方で専業主婦率ほどの大きな差はないが、日台の比較でいうと台湾は長時間労働になっている。この理由として育児の外部化があり、地方では専業主婦自ら行う家事・育児を、都市部ほど親族などのサポートを得ながら生きているという。

寺村（2021）は更に、高学歴化に伴う晩婚化によって出産への諦めがより明確にあらわれていると指摘する。台湾の平均初婚年齢は 2019 年男性 32.6 歳、女性 30.4 歳、参考に日本は男性 31.2 歳、女性 29.6 歳である。台湾においては共働きであること（夫婦ともに収入が高いこと）が幸福度を上げ、結婚や出産が特に女性の幸福度を上げない（むしろ出産後は下がる）というデータについても、一定のインパクトがある。台湾では共働きで女性も男性同様の長時間労働で家事育児負担が大きく、祖父母の育児サポートでも補い切れていない可能性があるというものである。

高学歴女性増加によって、学歴による賃金格差が拡大した一方で、男女賃金格差は縮小した。就労に意欲をもつ女性たちが、親族やベビーシッターのサポートを得ながら就労する（斧出・藤田（2007））というのが、台湾社会でよく見られる光景であることに間違いなさそうだが、寺村（2021）で取り上げられる出産を諦める女性、親族による育児サポートでも不足している可能性などを鑑みると、台湾における育児環境についての今後の動向を注視する必要がありそうだ。

3 章　修士論文研究に向けて

以上、現代台湾人女性の高度な社会参加傾向を説明するための一つの道筋として、娘の役割に注目することで家族関係を再考しようとした植野（2011）の視点を援用する可能性を探ってきた。「『娘』に視点を置

いて考察することは、婚姻によって帰属を変更する女性の一生を分断せずに捉えうる」（植野 2011）。晩婚化、離婚率上昇が進む社会において、1 人の人生を捉えようとするこの視点はより重要性を増すと考えられる。

自身の修士論文研究においては、日本に定住している台湾人女性を対象としたライフストーリーの聞き取り調査を予定しており、現時点では以下 2 点の問いがある。

1 点目は、日本に定住している台湾人女性が、具体的にどのようにして親族とサポートし合っているかである。台湾人女性の高度な社会参加の背景には、親族からの家事・育児のサポートがあり、お返しに親への経済的援助や老後の世話を提供するという関係性があるということは、植野（2011）などの先行研究によって既に定説化しているが、日本に定住する彼女たちと台湾に住む親族は、そうしたやり取りを物理的距離によって簡単に行うことができない可能性が高い。文献調査と自身の聞き取り調査から、彼女たちが具体的にどのような行動を取っているのか明らかにしたい。

2 点目は、上記を受けて、強固と言われてきた漢民族の親族ネットワークにおいて、親と娘の関係の変容や文化規範の揺らぎによって、新しい関係性の形が生まれているのではないかという点である。

尚、植野（2011）による娘の儀礼的役割にしても親族による家事・育児サポート、そのお返しの老後の世話にしても、結婚後の娘と親との関係である為、未婚の娘と親との関係については、これから十分な調査が必要である。学生時代を終えた後に未婚の状態で就労をする期間が長くなっている現代の台湾人女性は、自由に使えるお金も増え、より自らの意志に基づいた社会参加を日常的に実践していると言えるだろう。台湾人女性の中でも最も高度な社会参加を行っている可能性があるという観点から、未婚の台湾人女性への聞き取り調査も実施したい。

台湾で生まれ育った台湾人である彼女たちが、日本でどのような「社会進出」を日々送っているのかは非常に興味深い。植野（2011）で描かれた新時代に対応し開明的な思考を身に着けて行った親と娘のように、台湾社会・台湾人全体が変化に対して臨機応変に対応する術を元来身につけているのだとしたら、その社会から学ぶことは大きいはずだ。

【参考文献】

植野弘子「父系社会を生きる娘―台湾漢民族社会における家庭生活とその変化をめぐって―」『文化人類学』,2011,日本文化人類学会

斧出節子・藤田道代「台湾の育児」,落合恵美子編『アジアの家族とジェンダー』,2007,勁草書房

瀬地山角編著「少子高齢化の進む東アジア–「東アジアの家父長制」からの 20 年」『ジェンダーとセクシュアリティで見る東アジア』,2017,勁草書房

張晋芬（大平幸代訳）「台湾の女性労働力および職場におけるジェンダー不平等」,野村鮎子・成田靜香編『台湾女性研究の挑戦』,2010,人文書院

寺村絵里子『日本・台湾の高学歴女性―極少子化と仕事・家族の比較』,2021,晃洋書房

松浦司「有配偶者の出産意欲の日台比較」, 寺村絵里子『日本・台湾の高学歴女性―極少子化と仕事・家族の比較』,2021,晃洋書房

行政院主計總處「婦女婚育與就業調查報告2016」（2022年２月１日参照）
https://ebook.dgbas.gov.tw/public/Data/771217174890V10W9I.pdf

行政院主計總處「人力資源調查統計年報2020」2021